三重県志摩漁村片田における近代アメリカ移民の輩出要因の再検討

―社会関係と漁法の変化に着目して―

高　木　秀　和

1　はじめに

本稿の目的は、近代の三重県志摩郡片田村（現・志摩市志摩町片田）からアメリカ合衆国（以下、アメリカ）へ渡航したアメリカ移民の実相とその輩出要因を再検討することである。熊野灘に面した片田（図1）は、三重の「アメリカ村」とされ、近代に多くのアメリカ移民を輩出した。

日本人の海外移民に関する研究は、移民を輩出した地域社会を対象としたミクロレベルの研究と、移民を受け入れたホスト社会と当該社会への移民の適応を分析する研究に大別することができる。

前者の研究は、地域史を扱う諸分野で行われており、おもに海外移民を多数輩出した地域を対象とした研究が蓄積されてきた。たとえば、海外移民を多数輩出した瀬戸内地方の研究として、沖合化がみられる集落を事例にそのリーダーがもつ地域外へのネットワークに着目し、「マニラへの移民送出の村」という地域のアイデンティティが形成されていく過程を論じた武田（1999）や、同じくマニラ移民を多数輩出した村落を事例に、世帯レベルの分析により移民の社会関係、生業経歴や、多様な居住地選択のあり方を検討し、移民を中心に出身地の社会・経済の再編がすすんだことを明らかにした花木（2010）などが近年の代表的な研究である。

一方、アメリカ移民研究から後者の研究をみると、南川（2007）はロサンゼルスと日本からそこへ渡った人々を対象に、歴史社会学の立場からエスニシティ、人種、ナショナリズムという要素がいかに関わりながら、自他を「日系アメリカ人」ととらえるようになったのかを、時系列を追いながら多面的に論じた。個別テーマの研究も行われ、水野（2014）は第二次世界大戦下における日系ジャーナリズムと政府の報道統制について、その変化を追いながら実態を明らかにした。

近年の移民研究では、一国家の枠組みにとらわれないトランスナショナリズムにもとづいた研究のあり方が検討されるようになり、今野（2015）は和歌山県太地町からカリフォルニア州ターミナル島への移民を事例に、移民の出身地と移住先に注目したトランスローカルな視点から検討を行った。さらに、今野（2016）はターミナル島に居住した日本人移民による漁業の歴史を研究することを事例に、「生業」「共同体形成」「漁業法」「人種・エスニック関係」「国際関係」を分析することにより、「ミクロでローカルな事象に視点を定めつつも、グローバルな広がりを持ちうる」（同：34）ことを提起した。

しかし、今野（2016）が指摘するように、「研究者が軸足を置く国や地域の事例分析に比重が偏りがちな傾向」（同：34）を乗り越えるために前述のようなアプローチが考えられる

ものの、「資料収集の困難及び専門性の違いによる限界という問題」（同：42）に直面することになるだろう。こうした問題を克服するために、「国境を超えた研究者同士の交流と協働」を提案している（同：43）。国際的な共同研究におけるプラットフォームづくりについては文理問わず数多くの分野で行われているが、「研究者が軸足を置く国家や地域の事例分析」が行われてこそ「国境を超えた研究者同士の交流と協働」が実現できるということもできる。そのためには、移民研究では河原（2011）が指摘するように、多様な資料を用いながら分析を行うとともに、当事者からの聞き取り調査をすすめていく必要があるだろう。

本稿が対象とする当時の三重県志摩郡片田村から輩出されたアメリカ移民に関する研究は、移民の数量的把握が中心であり、片田からのアメリカ移民第一号である伊藤りき（1889（明治22）年渡航）や、画家として世界的に活躍した平賀亀祐などが志摩市の生んだ郷土の偉人として取り上げられることが多く[(1)]、彼ら以外の移民のほか、移民の社会関係や当時の経済状況などの分析はほとんど行われてこなかった[(2)]。

そこで高木（2013）では、筆者が収集することができた3冊の移民記念誌と1冊の自治体史の巻末に掲載された名簿から、片田出身者166人とうち75人の渡航年を把握し、1906（明治39）年あたりと1918（大正7）年に移民者数のピークがあり、渡航年と移民者の姓をクロスさせると一定の傾向性がみられることを明らかにした。さらに、聞き取り調査にもとづいて移民の社会関係を整理すると、片田でも「冒険者タイプ」とともに「呼び寄せタイプ」の移民が存在したことが浮かび上がってきた。高木（2014）では、一部のアメリカ移民を含む「片田出身海外引揚者名簿」（山本 1972：199-211）の分析と、聞き取りにもとづいてこれまでの三重県の移民研究で着目されてこなかったカナダやパラオへの移民の事例を考察し、移民輩出の社会経済的要因を明らかにした。これらを受けて、高木（2016）では片田における近代の漁法の変化を検討し、アメリカ移民が増加する1900年代前半に複数回発生したサンマ漁船の遭難事故が、その輩出を促した要因であることを示唆した。

しかし、高木（2013；2014）では名簿を分析対象としたため、片田から輩出されたアメリカ移民のおおよその傾向を把握することはできても、名簿からの欠落者の存在も予想された。片田のアメリカ移民を研究する基礎的作業として、名簿の再分析とともに手記の文中から把握可能な人物も対象に分析を行い、その全体的傾向を再検討する必要もあるだろう。また、片田からアメリカ移民を輩出した社会経済的要因のひとつとして指摘したサンマ漁船の遭難事故とアメリカ移民輩出との関係も不明瞭であり、当時の状況を記憶する話者からの聞き取り調査をもとに、両者の関係

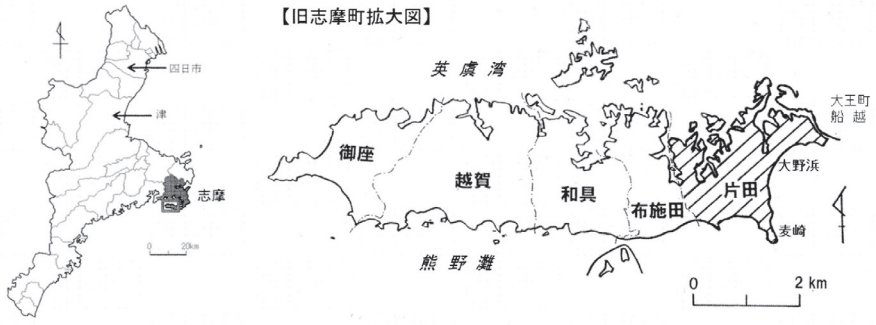

図1　研究対象地域の位置

性を吟味することも求められる。あわせて、片田をフィールドに移民輩出家の社会関係の分析をすすめ、「交錯した親族関係にもとづく親族チェーン（くさり）」（高木2013：156）の事例を蓄積し、親族間の関係性も改めて検討しなければならないだろう。

そこで本稿では、片田から輩出されたアメリカ移民に関する基礎的研究として、まず第２章で名簿と手記を用いてアメリカ移民のデータベースを作成することにより、可能な範囲で姓別、渡航年別移民者数を再検討し、その全体的傾向を把握する。つぎの第３章では、その作業をふまえ、聞き取り調査から明らかになった具体例をもとに、移民が輩出された要因を当時の片田村の社会経済の状況から考察する。最後に第４章で、本稿で明らかになった点とともに、今後の課題を整理する。

なお、本稿では分析に使用した文献の制約上、近代の片田村からアメリカへ移民した近代アメリカ移民を検討の対象とし、戦後に渡米したいわゆる新移民はデータベースから除外した。したがって、本稿で使用するアメリカ移民の語は、近代アメリカ移民を指しているが、第３章では一部新移民も含んでいることに注意されたい。

２　アメリカ移民のデータベース化とその全体的傾向の再検討

まず、公刊された文献に収録された移民名簿や手記などから把握可能な範囲でアメリカ移民者名を抽出し、片田から輩出されたアメリカ移民のデータベース作成を試みる。本章では、それにもとづきアメリカ移民の全体的傾向を把握するために、姓別移民者数と渡航年を整理し、それらの再検討を行う。

本稿ではデータベース作成のために、『南加三重県人発展記念史』の名簿と手記（南加三重県人会1923）、『サンピドロ同胞発展録』の手記（竹内1937）、「片田出身海外引揚者名簿」（山本1972：210-211）、『三重県人北米発展史』の名簿と手記（三重県人北米発展史編纂委員会1966）、『片田村郷土誌』の名簿と本文（山本1972：192-197）、『志摩町史』（志摩町史編纂委員会1978）の名簿を用いた。

これらの資料を用いてデータベースを作成した結果、表１のように32の姓、163人のアメリカ移民を確認することができた。高木（2013）では166人の移民を抽出しているが、本稿では誤記の可能性が大きい人物を除外し、一部を除いて女性を対象としなかったため、移民数が減ったかたちとなった。本稿で女性を対象としなかった理由は、分析で用いた名簿には男性の氏名が、手記は世帯主の男性名で書かれており、最初期のアメリカ移民である1889（明治22）年の伊藤りきと、1895年（明治28）年の２人を除けば、７人の女性の氏名は『志摩町史』（1978）にのみ掲載されているからである。また、多くの手記には妻や子として女性の名前がみられるものの、妻の生家の姓や位置を特定することができず、女性の名前が掲載されていない手記が多いことも挙げられる[(3)]。

表１によると、ＡからＳ姓より輩出され

表１　片田から輩出されたアメリカ移民の姓別人数（単位：人）

A姓	B姓	C姓	D姓	E姓	F姓
23	19	18	18	12	10
G、H姓	I、J、K姓	L、M、N、O姓	P、Q、R、S姓	その他13姓	計
各9	各4	各3	各2	各1	163

注：最初期のアメリカ移民（1889、1895年）を除き、女性は含まない。以下同じ。
資料：『南加三重県人発展記念史』（1923）、『サンピドロ同胞発展録』（1937）、『三重県人北米発展史』（1966）、『片田村郷土誌』（1972）、『志摩町史』（1978）により作成。

表２　文献で把握可能な A、B、C、D 姓のアメリカ移民と渡航年

姓	No.	[記名]	[記手]	[サン]	[引揚]	[発名]	[発手]	[郷土]	[町史]	渡航年	他の渡航年・備考
		1923		1937	–	1966		1972	1978		
A	i							△		1895	
	ii							△	○	1895	女性
	iii	○	○	○		○		○△	○	1899	
	iv	○	○			○		○△	○	1900	
	v	○				○		○	○	1900	
	vi	○				○	△	○	○	1903	
	vii	○	○			○		○	○	1905	
	viii					○	○	○	○	1906	
	ix	○		○		○		○	○	1907	
	x	△		○		○		○	○	1915	
	xi	○	△	○		○		○	○	1916	
	xii	○		○		○	○	○	○	1917	1924
	xiii	○		○		○		○	○	1918	
	xiv	○		○		○	○	○	○	1919	1918
	xv			○	○				○	1930	
	xvi	○				○		○	○	n.d.	
	xvii	○				○		○	○	n.d.	
	xviii	○				○		○	○	n.d.	
	xix	○				○		○	○	n.d.	
	xx					○		○	○	n.d.	
	xxi		△				△		○	n.d.	
	xxii						△			n.d.	
	xxiii						△		○	n.d.	

姓	No.	[記名]	[記手]	[サン]	[引揚]	[発名]	[発手]	[郷土]	[町史]	渡航年	他の渡航年・備考
		1923		1937	–	1966		1972	1978		
B	i	○		○		○		○	○	1905	
	ii	○	○			○		○	○	1906	
	iii	○		○		○		○	○	1906	
	iv	○		△	○	○		○	○	1907	1906
	–			○						1907	ivと同一人物？
	v	○		○		○		○	○	1908	1915
	vi	○		○		○		○	○	1915	
	vii	○		○		○		○	○	1922	
	viii			○		○		○	○	1924	
	ix	○				○		○	○	n.d.	
	x	○				○		○	○	n.d.	
	xi	○				○		○	○	n.d.	
	xii	○				○		○	○	n.d.	
	xiii	○				○		○	○	n.d.	
	xiv				○					n.d.	
	xv				○	○		○	○	n.d.	
	xvi					○		○	○	n.d.	
	xvii					○		○	○	n.d.	
	xviii					○		○	○	n.d.	
	xix								○	n.d.	

注１：［記名］は『南加三重県人発展記念史』の巻末名簿、［記手］は同書の手記（以上 1923）、［サン］は『サンピドロ同胞発展録』（1937）、［引揚］は『片田村郷土誌』（1972）の引揚者名簿、［発名］は『三重県人北米発展史』の巻末名簿、［発手］は同書の手記（1966）、［郷土］は『片田村郷土誌』（1972）、［町史］は『志摩町史』（1978）。

（表２のつづき）

姓	No.	［記名］	［記手］	［サン］	［引揚］	［発名］	［発手］	［郷土］	［町史］	渡航年	他の渡航年・備考
		1923		1937	－	1966		1972	1978		
C	i	○				○		○	○	1906	
	ii	○		○		○		○	○	1906	1907
	iii	○	○			○		○	○	1907	
	iv	○	△	○		○		○	○	1907	
	v			○		○			○	1907	
	－							○		1907	vと同一人物？
	vi	○		○		○		○	○	1918	
	vii			○		○		○	○	1923	
	viii			△						1934	
	ix	○				○		○	○	n.d.	
	x	○				○		○	○	n.d.	
	xi	○				○		○	○	n.d.	
	xii	○				○		○	○	n.d.	
	xiii	○				○		○	○	n.d.	
	xiv	○				○		○	○	n.d.	
	xv					○		○	○	n.d.	
	xvi							○	○	n.d.	
	xvii			△					○	n.d.	
	xviii			△					○	n.d.	

姓	No.	［記名］	［記手］	［サン］	［引揚］	［発名］	［発手］	［郷土］	［町史］	渡航年	他の渡航年・備考
		1923		1937	－	1966		1972	1978		
D	i	○	○	○	○	○		○	○	1906	1907
	ii	○		○	○	○		○	○	1907	
	iii	○	○			○		○	○	1907	
	iv					○	○	○		1920	1913
	v				○					1924	
	vi				○	○		○	○	1931	
	vii	○				○		○	○	n.d.	
	viii	○				○		○	○	n.d.	
	ix	○				○		○	○	n.d.	
	x	○				○		○	○	n.d.	
	xi	○				○		○		n.d.	
	xii	○				○		○	○	n.d.	
	xiii	○			○	○		○	○	n.d.	
	xiv	○				○		○	○	n.d.	
	xv					○		○	○	n.d.	
	xvi								○	n.d.	
	xvii								○	n.d.	
	xviii								○	n.d.	

注２：○印は移民名者がある場合、△印は他者の手記の文中に該当の移民者名が登場する場合を指す。ただし、［郷土］の△印は移民者名簿の直前に掲載の本文中に登場する場合を指す。
注３：渡航年の「n.d.」は渡航年の記載がない。また、他の渡航年は資料により渡航年が異なる場合、可能性が低い渡航年を記した。
注４：備考の「同一人物？」は、氏名の誤記が強く疑われる場合に記し、その人物には番号を付さず「－」とした。
資料：上記注１により作成。

たアメリカ移民は複数おり、そのなかでもＡ姓が全体の14.1%を占めており、およそ半数が上位４位までの姓（ＡからＤ姓）となっている。高木（2013）で指摘したように、片田を二分する郷という地域単位のうち、Ａ姓は西部の乙里郷、Ｃ姓は大野郷に集中して分布している。

表２は、アメリカ移民を輩出した上位４姓

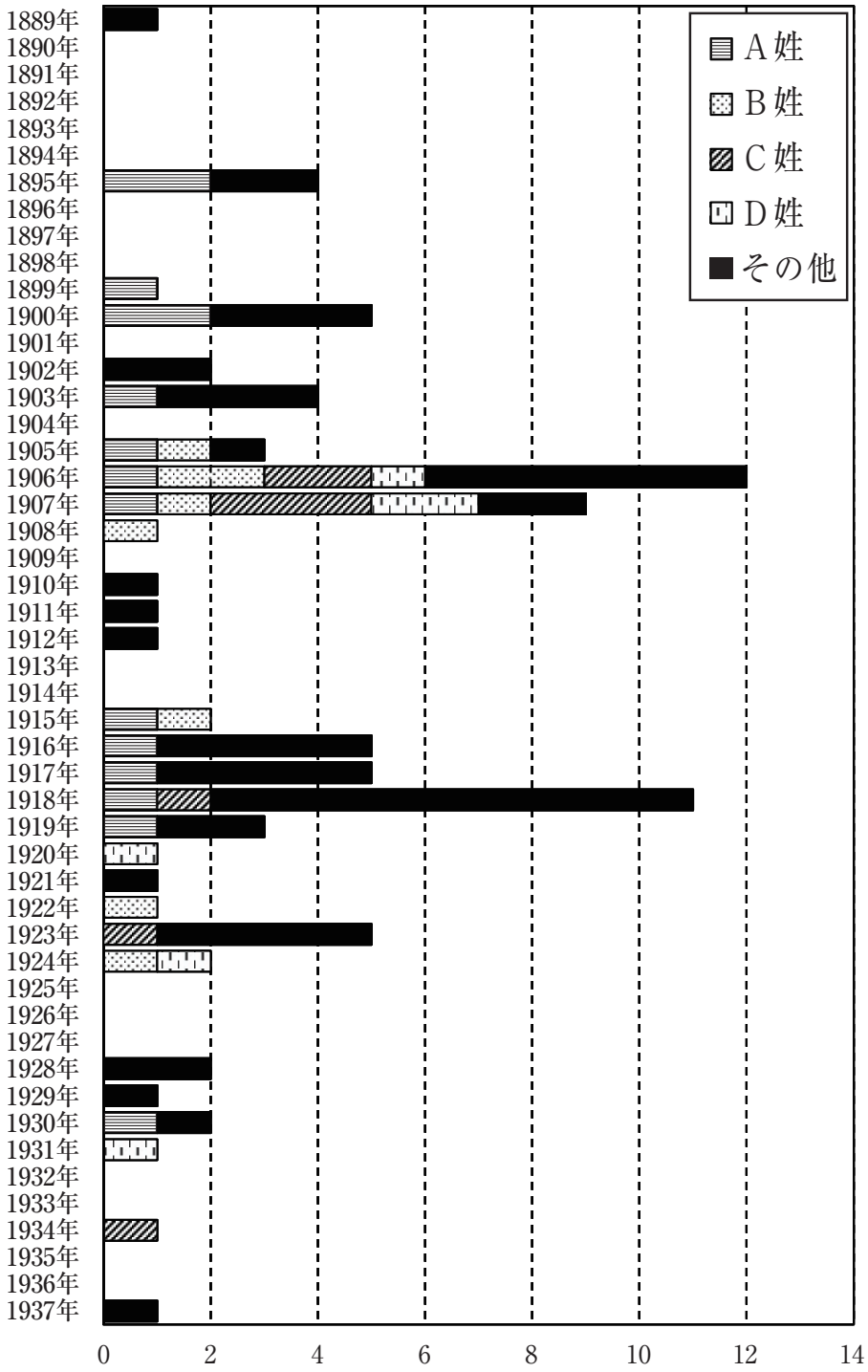

図２　渡航年別姓別移民者数（1889～1937年）（単位：人）

資料：表２の注１により作成。

を事例に、データベースのなかから移民別に氏名が掲載された資料名と渡航年を整理したものである。本稿では、他者の手になる手記に登場した移民者名も抽出した一方、前述したように複数の資料を照らし合わせて誤記の可能性の高いものは除外し、備考欄に注記した。また、『志摩町史』（1978）には、「三重県人北米発展史より（明治、大正、昭和戦前）」（同：239）とあるものの、同書が独自に採録したと思われる移民者名もあるために、分析の対象として加えた。さらに、資料により渡航年が異なるケースが少なくなく、その際にはもっとも多い渡航年を採用し、それ以外を他の渡航年として注記した。

その結果、AからD姓ではA-i、A-xxii（A-xiiの父）、B-xiv、C-viii（C-ivの長男）、D-v（長男、次男と引揚、ただし彼らは分析対象外）の移民者名を新たに抽出することができた。これらは新たな移民輩出家を抽出した事例ではないものの、移民一世や呼び寄せによる移民などを把握することができ、データベース化により近代全体をとおして片田から輩出されたアメリカ移民を俯瞰することが可能となった。なお、前述した『志摩町史』（1978）にのみ掲載された女性のうち、A姓2、B姓1、C姓1人である[(4)]。

渡航年に着目すると、片田から輩出されたアメリカ移民の最初期である1895（明治28）年から、二世の時代となった1930年代まで幅広く分布しており、同姓が同年または近い年に移民する傾向がみられることがうかがえる。しかし、渡航年が不明（n.d.）な移民も多く、しかも記録された渡航年が異なっているケースも少なくないために、移民全体の渡航年を正しくとらえるには多くの課題が残る。

限られた資料の検討から、アメリカへの渡航年が判明した移民を数えると、高木（2013）で判明した75人を上回る89人の移民者名が浮上した。アメリカ移民を渡航年別および姓別に整理すると、図2のようにグラフ化することができる。それによると、高木（2013）で指摘したように、1906（明治39）年頃と1918（大正7）年に移民者数のピークがあることがうかがえる。

姓別にみると、移民をもっとも多く輩出したA姓は全時期にわたり分布しており、なかでも一時帰国した伊藤りきとともに1895年に渡航した移民や、移民が増加をみせ始める1899年の移民などのように、最初期に多く分布しているのが特徴である。そして、1905年にはB姓が移民し、移民のピークを迎えた1906年には4姓すべてが渡航している。A姓とは異なり、B、C、D姓は前半のピーク時に集中的に渡航していることが読み取れ、1918年のピーク時にはその他の姓の移民が目立っている。したがって、A姓が片田からアメリカへの移民の流れを形成し、ついでB、C、D姓が、そして多くの姓（人々）がそれに続いたといえ、高木（2013）で指摘したように、A姓は乙里、C姓は大野に偏在するために、両者が両郷の、つまり片田（全体）のアメリカ移民の牽引役となったと思われる。また、B、C、D姓も、期間の後半にも少数ながら移民を輩出し続けていることも指摘できる。

このように、公刊された文献に収録されたアメリカ移民の名簿や手記からその全体的傾向を把握することはできるものの、移民現象の背景となる個々の移民者間の社会関係や生業などをとらえることは困難である。そこで次章では、聞き取りにもとづきながら、アメリカ移民の社会経済的要因を再検討する。

3　社会関係と漁法の変化からみたアメリカ移民の輩出要因

本章では、近代の片田村からアメリカ移民が輩出された要因を、聞き取り調査とそれにより復元した家系図をもとに、当時の社会経

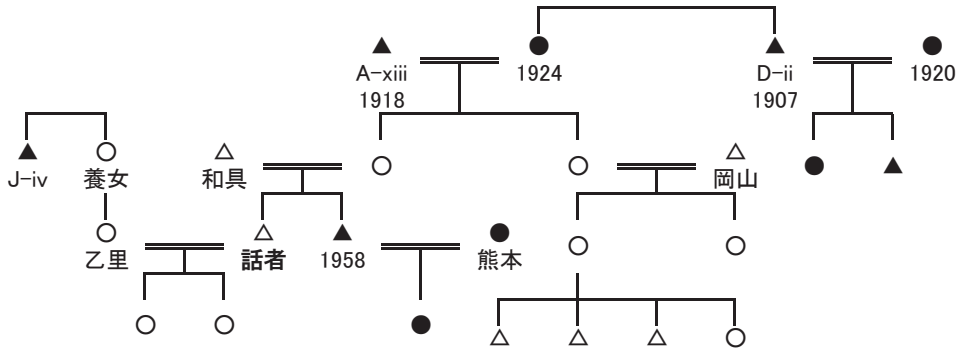

図３　Ａ姓のアメリカ移民の事例

注：△印は男性、○印は女性、▲●印は在米経験者、数字は渡航年、地名は出身地を指し、A-xiii などの符号は表２に対応している（ただし J、N 姓はなし）。図４、５も同じ。
資料：聞き取り、表２の注１により作成。

済状況から考察する。

図３は、もっとも多くのアメリカ移民を輩出したＡ姓のうち、乙里に居を構えた A-xiii 家からみた社会関係を示している。A-xiii 氏は後半のピークである1918（大正７）年に渡航し、1924年にＤ姓が生家の妻とともに再渡航した。彼女は D-ii 氏の実妹であり、彼は前半のピークである1907（明治40）年に渡航している。両者の渡航時期や妻の呼び寄せの時期にズレがみられるために、D-ii 氏の存在が A-xii 氏の移民を促した直接的要因だとは考えにくいが、移民輩出家の社会関係を考えるうえで興味深い事例である。また、図示していないものの、A-xiii 家の隣が1905（明治38）年に渡航した B-i 氏宅であり、地縁的関係が A-xiii 氏の移民を促した可能性がある。なお、A-xiii 氏の孫にあたる話者の実弟は1958年に留学のために渡米し、それ以来戦前期に片田出身者も居住したサンフランシスコ郊外に在住しており、さらに話者の妻の実母の義兄弟がＪ姓の移民者である。このように、本事例からも地縁や親族関係にある者の

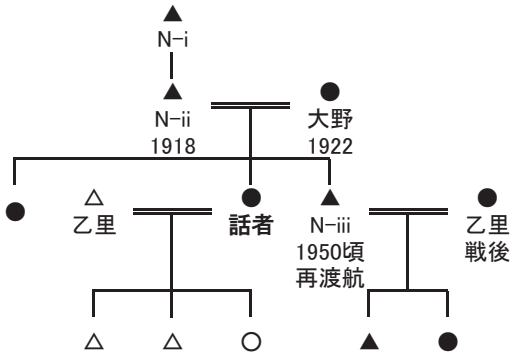

図４　Ｎ姓のアメリカ移民の事例

資料：聞き取り、表２の注１により作成。

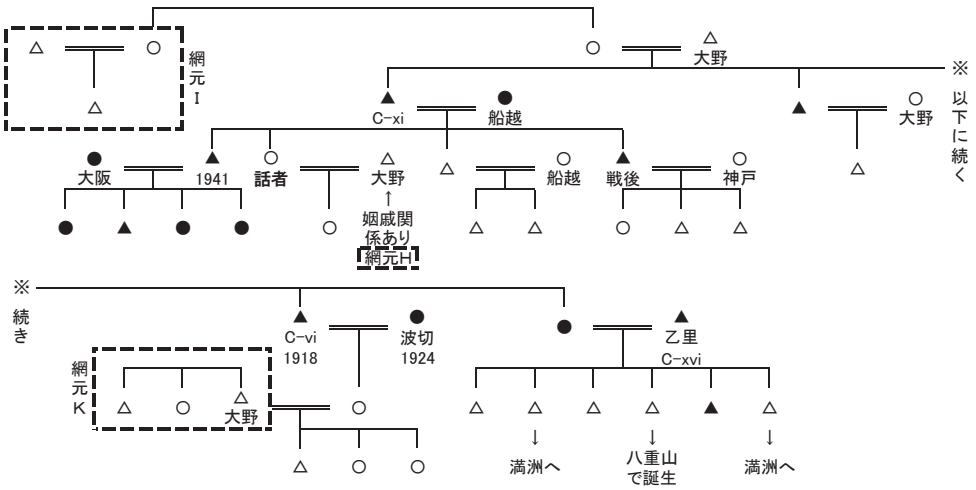

図５　サンマ漁船を経営したＣ姓のアメリカ移民の事例

注：破線の枠は四艘張漁の網元家、「↓」以下の地名はアメリカ以外の移民先を指す。網元 H、I、K の符号は、高木（2015）に対応しており、本稿の表１のアメリカ移民の姓とは一致していない。
資料：聞き取り、表２の注１により作成。

なかにアメリカ移民が多く、相互に影響を及ぼし合っていることが指摘できる。

図４は、片田で12番目に多くの移民を輩出したＮ姓の事例であり、大野のＮ家が家族単位で渡航した。話者によると、彼女の実祖父にあたる N-i 氏が貨物船で渡米したのち、アメリカの市民権を獲得したという。N-ii 氏は、後半のピークである1918年に父の呼び寄せで渡航し、1922（大正 11）年には大野に生家がある妻とともに再渡米した。話者とそのキョウダイは、N-i 氏とともに1931（昭和6）年頃に帰国し、1941 年に両親が帰国するまでは離れ離れで生活した。戦後の1950年（昭和25）頃、アメリカ生まれの N-iii 氏は再渡米し、のちに乙里に生家がある妻を呼び寄せた。Ｎ家の事例からは、移民一世である N-i 氏がアメリカへ移民した時期や背景をうかがうことができないものの、N-ii 氏は父の呼び寄せにより後半のピーク時に渡航しており、高木（2016）で指摘したように後半の移民者数のピークは呼び寄せによる移民者が多かったことが考えられる。また、本事例の N-iii 氏のような移民二世や、図３の話者の実弟のように戦前のアメリカ移民に強く関係している者（祖父母がアメリカ移民）が、新移民として戦後再び渡航するケースも少なくないことがうかがえる。

つぎに、アメリカ移民を促した経済的要因をみるために、当時移民輩出家とその親族が営んでいた漁法を加味しながら社会関係を考察する。

図５は、片田で３番目に多くのアメリカ移民を輩出したＣ姓のうち、大野でサンマ漁船（サイラ船）を営んでいた C-xi 家を中心とした社会関係を示したものである。話者への聞き取りによれば、C-xi 氏と彼の実父は親子でサンマ漁船を営んでいたが、明治時代後半から大正時代に多発した遭難事故により漁船が破損した[(5)]。C-xi 氏は、サンマ漁船を再建するために乙里の財産家から資金を借用したものの、返済することができなかったために渡米を決意したという。同家では、はじめに C-xi 氏が渡航し、後半のピークである1918 年に C-vi 氏らキョウダイ３人を呼び寄

せた。なお、C-xi 氏の実妹は乙里の C-xvi 家に婚入し、同家はアメリカ以外にも八重山諸島や満洲へも渡航している[(6)]。さらに、サンマ漁船を営んだ C-xi 家と、その衰退後にさかんになった四艘張漁を営んだ大野の網元 H、I、K 家と親族関係にあることも特筆され[(7)]、親族形成には地縁とともに漁業経営者（同士）という家格も影響していることが考えられる。なお、話者の実兄は1941年に渡米して研究者として活躍し[(8)]、実弟は兄を頼りに戦後アメリカへ留学した（のちに帰国）。

図５の事例から、アメリカ移民を促した要因のひとつとしてサンマ漁船の遭難事故が挙げられることが確認できた。しかし、サンマ漁船の遭難事故の発生時期や C-xi 氏の渡航年が不明であることから、さらなる調査を行う必要がある。

４　おわりに

本稿では、片田から輩出された近代アメリカ移民に関する基礎的研究として、まず公刊された文献に収録された移民名簿や手記を用いてアメリカ移民のデータベースを作成し、姓別、渡航年別移民者数を再検討してその全体的傾向の把握を行った。つぎに、その作業をふまえて聞き取り調査から明らかになった具体例をもとに、移民が輩出された社会経済的要因を、移民輩出家の社会関係や生業から考察した。

データベースを作成した結果、32姓、163人のアメリカ移民と、そのうちの89人の渡航年を把握することができ、名簿分析では欠落していた移民の把握とともに、1906（明治39）年頃と1918（大正７）年に移民者数のピークがあり、姓ごとに渡航年にパターンがみられることを再確認することができた。また、聞き取り調査にもとづく移民輩出家の社会関係と漁法の分析により、片田においても移民輩出の社会的要因として親族、地縁関係とともに、後半の移民者数のピークには呼び寄せの力が大きく働き、戦後以降の新移民の動きにも影響を与えていることが浮かび上がってきた。そして、アメリカ移民の輩出を促した要因のひとつとして、サンマ漁船の遭難事故が挙げられることが再確認できた。

今後の課題として、さらなる調査により移民輩出家の社会関係を明らかにし、婚姻関係から女性も分析対象に加えるとともに、サンマ漁から四艘張漁への転換と移民との関係を詳細に検討したい。そして、移民が片田の社会経済や文化に与えた影響を明らかにし、志摩の地域史のなかでの移民の存在とその現象の位置づけを行う必要もあると思われる。さらに、近代の移民だけではなく、それと戦後の新移民、再渡航した移民との関連性も検討したい。それらに加え、三重県の他地域や東海地方から輩出された移民との比較研究も行いつつ、片田のアメリカ移民というミクロレベルの事例を近代史のなかに位置づける作業も行っていきたい。

本稿では、移民を輩出した片田を対象とした分析に終始したが、片田出身者が移民先であるアメリカで営んだ漁法と日本で営んだ漁法との関連性や、彼らがアメリカ西海岸の太平洋北東部漁場の開発に果たした役割を検討し、本研究を漁業史やアメリカ史研究にも接続させていきたい。そのためには、聞き取り調査を重ね、あわせて新資料の発掘もすすめていきたいと考えている。

付記

本稿を作成するにあたり、聞き取り調査と資料調査に応じて下さった志摩市片田の皆さまには大変お世話になりました。また、本稿は愛知大学綜合郷土研究所研究費による研究成果の一部です。関係各位に対し、記して謝意を表します。

註

(1)　三重県や片田から輩出されたアメリカ移民の研究史や、近年の志摩市での平賀亀祐や伊藤りきを顕彰し地域資源化する動きなどは、高木（2013）を参照のこと。なお、平賀亀祐には自伝があり（平賀1970）、伊藤りきについては日本の親族との間で交わされた書簡が翻刻されており（里き・源吉の手紙を読む会編2011）、彼らは志摩市誕生10周年を記念して作成された刊行物のなかでも、明治時代の志摩地方を代表する人物として紹介されている（志摩市歴史民俗資料館編2015：24-25）。また、南カリフォルニア三重県人会が設立100周年を記念して2003年に建立した慰霊碑には、「志摩郡片田村出身の伊東（ママ）りきさんが17歳の若さでアメリカに渡ってこられたのは1889年のことでした。爾来多くの先人が成功を胸にアメリカに渡り、幾多の困難にも打ち勝ち今日の発展を築いて下さいました。（後略）」と刻まれ、三重県のアメリカ移民自身にとっても伊藤りきは特別な存在として記憶されている（南加三重県人会2004：8）。

(2)　田中（2008）は彼ら以外の移民の事例を、片田での聞き取りによりまとめている。

(3)　『志摩町史』（1978）にある７名の女性が採録された経緯は不明である。

(4)　その他、H 姓 2、M 姓 1 人である。

(5)　志摩市歴史民俗資料館編（2015）は、大正時代の志摩地方の動きとして、石油発動機付漁船が普及して漁場が拡大し、集団での出漁が多くなった反面、「重大な海難事故」も相次いだと概説している（同：26）。

(6)　戦前期に片田から八重山諸島への移住者や出稼ぎ者は少なくなく、真珠養殖のために渡ったケースもみられる（高木 2013）。

(7)　高木（2016）では、四艘網漁の網元 H が網元 I に対し、その経営と漁網を譲渡したことを指摘した（同：6-7）。本事例から、その譲渡には大野在住者という地縁的関係だけでなく、親族関係も機能していたことが推測される。

(8)　話者の実兄の氏名は、データベース作成に用いた文献に採録されていないため、表 1、2 などには反映されていない。

文献

河原典史（2011）「『前川家コレクション』にみる女性と子供たち－カナダ・バンクーバー島西岸の日本人－」『京都民俗』28、111-130。

今野裕子（2015）「和歌山県太地とカリフォルニア州ターミナル島をつなぐ同郷ネットワーク」米山裕・河原典史編『日本人の国際移動と太平洋世界－日系移民の近現代史－』（立命館大学人文学企画叢書 3）文理閣、163-189。

今野裕子（2016）「日本人漁民の国際移動と共同体形成」『歴史評論』792、33-45。

志摩市歴史民俗資料館編（2015）『志摩市合併十周年記念　志摩のあゆみ』同所。

志摩町史編纂委員会（1978）『志摩町史』志摩町教育委員会。

高木秀和（2013）「近代におけるアメリカ移民の輩出とその要因－三重県志摩市片田を事例に－」『年報・中部の経済と社会』2012 年版、149-158。

高木秀和（2014）「三重県志摩市片田における近代移民の社会経済的要因－カナダ・パラオ移民を中心に－」『年報・中部の経済と社会』2013 年版、185-197。

高木秀和（2016）「三重県志摩漁村片田における近代の漁法の変化と漁村社会の対応」『愛知大学綜合郷土研究所紀要』61、1-9。

竹内幸助（1937）『サンピドロ同胞発展録』。

武田尚子（1999）「地域のアイデンティティの形成－マニラへの移民送出の村（広島県沼隈郡田島村）を事例に－」『社会学評論』50（3）、393-408。

田中睦代（2008）「志摩からのアメリカ移民」『TRIO 三重の文化・自然・社会』9、三重大学大学院人文社会科学研究科、14-16。

南加三重県人会（1923）『南加三重県人発展記念史』同所。

南加三重県人会（2004）『南加三重県人会創立百周年記念誌』同所。

花木宏直（2010）「大正期～昭和初期の芸予諸島・

大三島におけるマニラ移民と国内出稼ぎの特性－旧岡山村口総地区を事例として－」『人文地理』62（5）、401-425。
平賀亀祐著･坂井米夫編（1970）『一本の釘』求龍堂。
三重県人北米発展史編纂委員会（1966）『三重県人北米発展史』三重県海外協会。
水野剛也（2014）『「自由の国」の報道統制　大戦下の日経ジャーナリズム』吉川弘文館。
南川文里（2007）『「日系アメリカ人」の歴史社会学－エスニシティ、人種、ナショナリズム』彩流社。
山本伊十郎（1972）『片田村郷土誌』郷土誌編輯室。
里き・源吉の手紙を読む会編（2011）『故国遙かなり－太平洋を渡った里き・源吉の手紙』ドメス出版。